

## 2025. 4. 29 その子なりの世界のひらき方

先週、年中児二人がダンゴムシを捕まえて遊んでいました。次の日、教員も一緒に入り、空き箱でダンゴムシのお家を作ります。ダンゴムシを捕まえたR子は家から人参など餌を持ってきていて、作ったダンゴムシの家に入れています。その様子を横で粘土していたM子がじっと見ていました。

その次の日、そのR子らのお家を見て、隣でS子らも空き箱などを使って大きなダンゴムシの家を作り始めます。S子らは「入り口はどうする?」「廊下をつけてみる?」など相談しながら、お家はどんどん大きくなっていきます。S子らがお家を作っているのをまた横で見ているM子。そして、その横で空き箱を使ってお家を作り始めます。S子らとのやりとりは特にありません。

M子はかわいいお家にしたいようで、中にカラーセロハンをつけたり、紙粘土で形作ったものを入れたりしています。M子なりのこだわりも見えてきます。

一方S子らはお家ができあがると、ダンゴムシを捕まえてきて入れていきます。そして、他の子供たちも集まってきて触ろうとするので、「やさしくさわってね」「みるのはいいよ」「そとにださないでね」と紙に書いて、お家に貼りだします。そのことをみんなの時間で全体にも紹介をしました。

M子はお家ができ、ダンゴムシを入れるのかなと教師は見ていると、ダンゴムシを入れようとはしません。実はM子はダンゴムシに触れません。苦手なのです。教師もその時初めて気がつきます。

その次の日、M子はまたダンゴムシのお家をアレンジしていきます。教師は「Mちゃん、ダンゴムシ一緒に探しに行く?」と聞くと、コクンとうなづきます。ダンゴムシを見つけ、教師がかわりに捕まえると、M子はちょんちょんとダンゴムシを突っついてみます。そして、一緒にいた友達にダンゴムシを家に入れてもらいました。

M子は「お水をかけてあげたほうがいいかな?」とカップに水を入れます。「でもこぼれたらお家がべたべたになっちゃう」「きりふきでちょっとだけかけようかな…」いろいろ考え始めます。その日の昼遊び、M子も紙に約束ごとを書き、貼っていました。

その次の日、登園するとすぐにダンゴムシのお家を見に行くM子。

「あれ?ダンゴムシいない。」よじ登ってでていったのかもしれませんが。

M子は「おうちが小さいから嫌なんかなー、もっと大きくしてあげよう」と空き箱をさらに持ってきてリフォームを始めます。その様子を見ていたK子もその横でダンゴムシのお家を作り始める姿も見られました。

自分なりに少しずつ世界をひらいていこうとするM子の姿を尊く感じました。

もともとダンゴムシが苦手だったM子。しかし、「ダンゴムシのお家」というところから「ダンゴムシの世界」にじりじりと近づいてきます。ダンゴムシというよりも「手作りお家」に惹かれたのかもしれませんが。

そこには年中さんらしい、ごっこ遊び的な、ファンタジー的な発達段階も感じます。

周囲の子のやっていることがM子の発意のきっかけにもなっています。自分ひとりだけの世界じゃなく、他者へ興味が広がっていく年中さんらしさも思います。自分のもともととの興味・関心も相まって、別にその子たちと絡むわけではないけれど、場を共有していく中でその面白さが伝播していきます。

ここまででM子はダンゴムシを「好き」になったわけではないと思いますが、出会うきっかけは人それぞれなんだと感じます。それと同時に、その世界をひらくきっかけもひらき方も子供たち一人一人違って、その姿を大切にしていきたいと思います。M子はお家作りからダンゴムシに出会い、ダンゴムシの死の経験、触ることでダンゴムシの体の質感や動きなどにも気付き、またそれが新たな出会いと気付きを生み、それらを幾重にも重ねながらこの先ダンゴムシを「好き」になっていくのかもしれませんが。もしかしたら、お家作りの方に興味が広がり、そっちを「好き」になるかもしれません。その展開の可能性は無限です。そこを一緒に探っていくこともワクワクします。いろいろな世界に足を踏み入れながら、いろいろ面白い世界はあるけれど、その中でも自分なりの好きを見つける。そのような経験を子供たちに保障していきたいです。

